〔島根県立大学松江キャンパス研究紀要　Vol. 60　61～70(2021)〕

戦前期地方旧制中学校文化に関する研究
－鳥取県の事例を中心に－

渡　辺　一　弘
（保育学科）

School Culture of the Early Stage of Old System Modern Local Secondary Schools Prior to World War II in Japan: A Case Study of Toltutori Pref.

Kazuhiro Watanabe

キーワード：地方旧制中学　学校文化　戦前期　鳥取県
Modern Local Secondary Schools, School Culture,
Prior to World War Ⅱ in Japan, Toltutori Pref

１．問題の所在

本稿は、戦前期の地方旧制中学校の学校文化（校風）を、鳥取県を事例にして明治前期に城下町で開校した学校（鳥取一中）、明治後期に商都で開校した学校（米子中）、大正期に開校した学校（鳥取二中）を中心に比較・検討することを目的とする。

昨年度の本紀要において、筆者は鳥取県の旧制中学校５校（鳥取一中、米子中、倉吉中、育英中、鳥取二中）の生徒の進路状況を、①明治37-44年、②大正１-８年、③大正９-15年、④昭和２-７年、⑤昭和８-13年の５つの時期に分け、①②の前半の時期と、③④⑤の後半の時期に分けて比較・検討し、以下の６点を明らかにした。

1. ①②の前半の時期は、鳥取県全体としては進学者も就職者も、その他の者もすべて増加している。該当する２校においては、鳥取一中もほぼ同じ傾向にあるが、米子中は進学者は減少し、就職等についても違う傾向が見られる。
2. ③④の後半の時期は、鳥取県全体としては進学者は、高等学校・大学予科、官公立専門学校への入学者数は、④期に増えて⑤期に減少しているのに対し、軍関係諸学校は、これとは逆に、④期に減って⑤期に大幅に増えている。私立専門学校は、漸次、増加傾向にある。就職者については、官公署へ就職する者、その他の物は増加しているが、教員になる者は逆に減少している。
3. ③④の後半の時期を各学校別に検討すると、データの内容から、先発校の鳥取一中と米子中、後発校の倉吉中と鳥取二中、私立の育英中に分類できる。
4. 先発校の鳥取一中と米子中では、官公立専門学校、軍関係諸学校、実業関係で傾向に差が見られる。
5. 後発校の倉吉中と鳥取二中では、私立専門学校、教員になる者で傾向に差が見られる。
6. 私立の育英中は、進学者の全体数が、他の４校より、大幅に少ない。

これら５校の学校関係資料を読むと、最初に示した城下町の鳥取一中と、商都の米子中の学校文化の

比較と共に、鳥取一中と大正期に開校した鳥取二中の学校文化の比較の記述も出てくる。当然のことながら、進路選択にも各学校の学校文化（校風）や伝統にも影響があると思われる。

そこで本稿では、鳥取一中、米子中、鳥取二中の学校文化（校風）を明らかにして、それがどのように形成され発展していったかを、学校の沿革史を中心とした記述資料を用いて検討することを目的とする。

2．事例研究の対象

本稿では戦前期の鳥取県の事例を取り上げ、鳥取一中、米子中、鳥取二中の３校を分析対象とした。

鳥取一中（正式名称は鳥取県立鳥取第一中学校、現鳥取県立鳥取西高等学校）は、鳥取県下最古の中学として、1873（明治６）年にその前身が開校した（＊藩校尚特館の伝統を受け継ぎ、開校時名称は、第四学区第十五番変則中学、その後鳥取中学（鳥取県第一尋常中学）となる）。

米子中は（鳥取県第二尋常中学、現鳥取県立米子東高等学校）は、県西部の最初の中学として、周辺地域における招致競争の後、1899（明治32）年に開校した。

鳥取二中（鳥取第二中学、現鳥取県立鳥取東高等学校）は、大正中期の全国的な中学校進学者激増期に、中学校増設要求や設置運動が高まる中、鳥取市内２校目、県立中学としては県内４番目の中学として、1923（大正12）年に開校した。当初は将来七年制高校にする構想もあり、独自の教育内容や方針を持っていた。

表1-1　大正15年の鳥取県内中学の学級数と定員

種別	校名	開校年	学級数	生徒定員
県立	鳥取一中	1873年	20	1,000
県立	米子中	1899年	20	1,000
県立	倉吉中	1909年	15	750
私立	育英中	1914年	10	450
県立	鳥取二中	1923年	8	500

出展：文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』、『創立九十周年記念誌』72-73頁より作成

表1-2　大正15年の鳥取県内中学の志願倍率

種別	校名	募集人員	志願者数	倍率
県立	鳥取一中	200	360	1.80
県立	米子中	196	475	2.42
県立	倉吉中	150	276	1.84
私立	育英中	150	111	0.74
県立	鳥取二中	100	175	1.75

出展：文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』、『創立九十周年記念誌』72-73頁より作成

なお参考までに、表1-1と表1-2は、それぞれ、大正15（1926）年の鳥取県内各中学校の学級数と生徒定員、志願倍率を示したものである。

開校が古い学校が学級数と定員が多く、学校の規模が大きいことと、県立中学の志願倍率が私立より高く、約1.8倍から2.4倍に達していることが分かる。

3．分析方法と分析資料

（1）分析方法

「学校文化」の定義は、『新教育社会学辞典』において、耳塚は学校集団の全成員あるいはその一部によって学習され、共有され、伝達される文化の複合体で、以下の３つの要素に分類している[1)]。

1）物質的要素：学校建築、施設・設備、教具、衣服等、学校内で見られる物質的な人造物

2）行動的要素：教室での教授＝学習の様式、儀式、行事、生徒活動等、学校内のパターン化した行動様式

3）観念的要素：教育内容に代表される知識・スキル、教師ないし生徒集団の規範、価値観、態度

ここで説明してある「学校文化」を構成している要素は、斎藤も指摘しているようにきわめて多岐にわたり、学校文化のほとんどすべてに関わっているものである[2)]。そのため、検討するに際し、どのような基準で分析を行うのかの判断が難しい。これに対し、久富は学校文化を規定する要因をカテゴリー化し、それぞれの要因から、学校文化を検討しようとした。具体的には、「制度文化」「教員文化」「生徒

表2　学校文化の諸要素とその顕在・潜在性

	①制度文化	②教員文化	③生徒文化	④「校風」文化
顕在 (explicit)	E1 教科・カリキュラム	E2 教師像	行事等で組織された生徒活動	
			E3 学校・教師に推奨された生徒自治・集団活動	E4 意識された学校統合
潜在 (latent)	L1 学校の制度枠組み	L2 教員層のもつ独自の行動様式	L3 教師が知らない生徒独自の仲間文化	L4 日常化して無意識化した象徴・儀式・儀礼

出典：久富（1996）30頁の表1-2を一部改変

文化」「校風文化」の４つの要因に着目して、学校文化の分析枠組みを提示した[3)]。表２はこの学校文化の諸要素を、その顕在と潜在において整理したものである。

この枠組みをふまえて、斎藤は学校文化の考察において新たなアプローチと史料論として中等諸学校の「校友会雑誌」や「自伝」等を主な分析対象とした。そしてその結果、具体的には「学校文化の表象としてのメディアへの着目」「学校文化における相克の諸相」「校風と学校文化」「生徒による自主的な学校文化の生成と生徒文化の多様な展開」「帝国日本と学校文化との相互関係の解明」を中心的な課題とした。

これらの先行研究を参考にして、本稿では、久富が提示した「制度文化」「教員文化」「生徒文化」「「校風」文化」[4)]の４つの要因に着目して分析を行う。特に表２において、太い実線で囲まれた部分（E３とE４）－久富はウォーラー流の狭義の「学校文化」と言っている－を踏まえて、これらが検討できるような具体的な項目（モノ）において、「制度文化」としては、学校の校訓（顕在）や基本的な精神（顕在・潜在の両方）、校章を、「教員文化」としては、特に歴代校長や教員の教育方針や雰囲気（顕在・潜在の両方）を、「生徒文化」「「校風」文化」としては、行事活動や校友会活動（顕在・潜在の両方）について、戦前期における鳥取県の鳥取一中、米子中、鳥取二中のそれぞれの学校文化を比較検討する。

（２）分析資料

分析資料は以下のものを用いた。

〈学校関係資料〉

【鳥取一中】

齋藤直貞　1933,『鳥城 創立第六拾年記念号 第五十四号』鳥取県立鳥取第一中学校校友会。

鶴田憲次　1978,『因伯 青春の系譜 鳥取一中の巻』鳥取西高等学校同窓会。

鳥取西高百年史編纂委員会　1973a,『鳥取西高百年史（本文編）』。

鳥取西高百年史編纂委員会　1973b,『鳥取西高百年史（資料編）』。

【米子中】

創立七十周年記念誌編集委員会　1969,『創立七十周年記念誌』鳥取県立米子東高等学校。

鳥取県立米子東高等学校　1989,『創立九十周年記念誌』。

【鳥取二中】

創立五十周年記念誌編集委員会　1972,『創立五十周年記念誌』鳥取県立鳥取東高等学校。

〈その他鳥取県教育関係資料〉
篠村昭二　1976,『鳥取教育百年史余話 上』県政新聞社。
篠村昭二　1980,『鳥取教育百年史余話 中』学兎社。
篠村昭二 1981,『鳥取教育百年史余話 下』学兎社。
稲村謙一・芦村登志雄・篠村昭二　1979,『郷土シリーズ（11）学校の今と昔－鳥取市・教育の流れ－』鳥取市教育福祉振興会。
古田恵紹・篠村昭二　1997,『戦後教育のふしぶし』篠村昭二（自費出版）。

4．分析結果と考察

（1）「制度文化」について

〈学校の校訓や基本的な精神・校章〉

表3は、鳥取一中、米子中、鳥取二中の校訓や根本精神、校章を比較してまとめたものである。鳥取一中の校訓は、明治42年4月の鳥取中時代に校規の遵守、師命の服従、生徒本分の全うを大綱とする生徒教養の方針を定めて制定された。しかし、生徒の気風が改善されなかったので、大正の後期に三つの訓条として新たな生徒訓育の骨子を制定した。この訓条は、長く伝えられ、鳥取一中の基本的な精神として伝承された。校章は明治19年頃制定された。ドイツ帽（角帽）の帽章に付けられた。六角形を図案化したもので、六方に放射する光芒、六徳、六経、六紀を表徴すると共に少年元気の溌剌たるを示し、此を明示している。なお開校当初の生徒たちは、その多くが鳥取の士族の子弟で、それ以外は一部篤志家や医者の子弟で、町屋の子弟は皆無とのことであった[5)]。

米子中において校訓とされているものは、明治42年度に制定された生徒訓条で、ほぼそのまま昭和17年の全面改訂されるまで受け継がれた。内容的には、鳥取一中とほぼ同様の内容で、勤勉、規律といった重複する文言も観られる。米子中の基本的な精神としては、初代教頭や最初の卒業生の言説に見られる、剛健、質素、スパルタ式、といった所謂「質実剛健」の様子が窺える。校章は明治41年に制定された。角棒の帽章にも付けられたトンボを模したデザインである。稲の育つ水田の象徴であるトンボと「米」の字を「中」で囲んだ構図で、米子の中学

表3　学校の校訓や基本的な精神・校章の比較

	校訓	基本的な精神	校章
鳥取一中	・礼譲ヲ重ンジ信義ヲ守ルベシ ・規律ヲ尚ヒ摂生ニ注意スベシ ・質素ヲ旨トシ勤勉ヲ事トスベシ ・協同及自治ノ精神ヲ養フベシ ・師長ニ敬事シ同輩ニ親切ナルベシ	・誠実ヲ以テ己ヲ持シ真理ニ服従スルノ念アルベシ ・敬愛ヲ以テ人ニ接シ和衷協同ヲ重ンズベシ ・勤勉ヲ以テ事ニ従ヒ業務ノ愉快ヲ感ズルニ至ルベシ	ドイツ帽（角帽）の帽章に付けられた。六角形を図案化した。
米子中	1.誠実ヲモッテ事ニ当り、終始一貫スベシ 2.勤勉学ヲ修メ、業務ノ愉快ヲ感ズルニ至ルベシ 3.従順ニ校則ヲ守リ師長ノ教訓ニ遵イ、真理ニ服従スルノ念アルベシ 4.親愛ヲモッテ学友相交ワリ、互ニ善道切磋スベシ 5.規律ニ従ッテ敏活ニ行動シ、礼儀ヲ重ンジテ高雅ナルベシ	剛健、質素、スパルタ式	角棒の帽章にも付けられた、トンボを模したデザイン。
鳥取二中	1.質実剛健ニシテ正義ヲ履践スベシ 2.己ヲ克治シ他ヲ寛容シテ親和スベシ 3.勤勉日ニ新ニシテ奉公ノ誠ヲ輸スベシ	解放的、自由主義的、質実剛健、勤労奉仕、親和の情	帽章にも付けられた、三つの柏葉の真ん中に「中」の文字を入れたもの。

出展：『鳥取西高百年史（本文編）』、『鳥取西高百年史（資料編）』、『創立七十周年記念誌』、『創立九十周年記念誌』、『創立五十周年記念誌』より作成

をアピールしている。なお開校当初の生徒たちの多くは、鳥取一中とは対照的に米子の商人たちの師弟で、それに米子附近の農村の出身者たちがそれに混じっていたとのことである[6)]。

鳥取二中の校訓は、開校後５年を経過した昭和２年に、生徒訓条として制定された。内容として特徴的なのは、「親和」という言葉である。当時の中学（特に公立）において、「剛健」という言葉はわりと多く使われたが、「親和」とか「寛容」といった柔らかい響きの言葉を使う学校は少ない。鳥取二中の基本的な精神として、教師と生徒が一緒になって新しい学校を作る気概（勤労奉仕）や、上級生が下級生に対してシゴキをしない、下級生から上級生への敬礼が無い、といった自由主義的な雰囲気があった。二中のこのような雰囲気については、例えば卒業生の以下の様な回想がある。

「作業とか、運動というのは、初期の二中の校風づくりに、大きな力となっているように思います。特に放課後運動といって皆が何かを一つやるんです（後略）」[7)]

「二中は土方学校だと冷やかされたりしたけど、上級生と下級生が仲良くするという校風が、作業を通じて自然に作られていったんですな」[8)]

校章は大正12年の開校時に制定されたが、その後すぐに質実剛健の校風樹立において、柏葉をもってこの精神を象徴している。当時の卒業生によれば、（当時の憧れの学校である）旧制第一高等学校を真似たものであろうとのことであった[9)]。なお開校当初の生徒たちは、七年制高校構想もあり、広く県下から俊秀が集まったとのことであった[10)]。

以上「制度文化」として、学校の校訓や基本的な精神、校章を比較検討すると、鳥取一中は当時の一般的な中学に見られる、勤勉、規律、質素な校訓等であり、校章もそれらを象徴とするものである。これに対して、米子中の校訓等は、鳥取一中と重複する部分が多いが、それに「質実剛健」の部分が加わったものと判断できる。校章には米子の地域性も窺える。鳥取二中の校訓等は、米子中の「質実剛健」的な部分に、親和や寛容といった柔らかい調和的な部分も併せ持つものあることが分かる。なお校章については、「質実剛健」的な部分を象徴とするものである。

（２）「教員文化」について

〈歴代校長や教員の教育方針〉

表４は、鳥取一中、米子中、鳥取二中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気を比較してまとめたものである。鳥取一中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気だが、先ずその特徴として、開校時の初代校長（当時、学長）は秋田県士族で英語を担当、多くの教員も慶応義塾出身者であることがいくらか影響を与えていると考えられる（＊特に校長は初代から３

表4　歴代校長や教員の教育方針や雰囲気の比較

	校長	教員
鳥取一中	・初代校長は福沢諭吉の門下生で官吏出身 ・初期の教科内容は、西洋伝来の自然科学中心 ・学内の基準は、学力の長短で長幼尊卑ではない ・大正期以降、文武両道として積極的に体育を奨励	・開校時、多くの教員は福沢の門下生であった ・英語はアメリカ流で、実学主義の方針であった ・当初「立身出世型」の進学指導だったが、大正後期から、「完成教育」への指導へと変化
米子中	・初代校長は、札幌農大出身で「武士道」を説教 ・国粋主義者で組名も教育勅語から取った ・3代校長の頃から、文武両道の精神が醸成された	・開校時、岡山師範在職教員が4人居た ・当初からスパルタ式で厳しい指導の教員が多く、この傾向は昭和初期まで変わらなかった
鳥取二中	・初代校長は鳥取市出身で、米子中、鳥取中（一中）の校長を歴任 ・授業と校友会活動を学校教育の表裏一体と捉えた ・特に体育活動を奨励した	・開校時、全国から参集、当初教員の異動も少ない ・教え方の上手なリベラルな教員も少なくない ・自由主義的な教育と質実剛健的な教育、勤労教育が調和していた

出展：『鳥取西高百年史（本文編）』、『鳥取西高百年史（資料編）』、『創立七十周年記念誌』、『創立九十周年記念誌』、『創立五十周年記念誌』、『郷土シリーズ（11）学校の今と昔－鳥取市・教育の流れ－』より作成

代まで慶應義塾出身である）。そのため慶応義塾の実学主義の考え方から、年齢や身分よりも学力という新しい尺度を用いた。立身出世的な指導については、大正後期になると、文武併進、つまり文武両道として、積極的に体育スポーツ（具体的には、野球や銃剣道その他）を奨励した。この背景には、この時期の明治末から大正期にかけて、鳥取一中が生徒のストライキ（その多くは、教員排斥が主因）で当時有名になっていたことと、この当時極端な上級生至上主義で、上級生の下級生に対する暴力も日常的で、校内に粗暴な雰囲気が溢れていて、その校風を一新すべく、当時名校長として県内で著名であった新校長（林重浩）の方針であるとのことである。その後、昭和に入ると、進学指導の厳しさによる多数の原級留置者（落第生）やカンニング生徒の増加を鑑み、社会に向けての「完成教育」への指導へと変化した。この時期、受験教科以外の「作業科」の設置もその方針の顕著な例である。

米子中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気は、初代校長が札幌農大出身（北海道出身）で新渡戸稲造と同世代の卒業生で、修身、倫理、博物を担当。「武士道」も説教した。国粋主義者で組名も忠組、孝組などと教育勅語から取った。明治末の第３代校長の頃から、文武両道の精神が醸成されていった。特筆すべきは、この第３代校長が、先述の鳥取一中の校風を一新した林重浩校長であることだ。彼は、米子中校長、鳥取一中（当時はまだ鳥取中）校長、そして新設の鳥取二中の初代校長にも就任する。林は、鳥取市出身で鳥取師範学校卒業後、附属小学校の訓導を勤めた後上京し、昼は東京音楽学校、夜は東京物理学校で学ぶという苦学を経て、音楽と数学の教員免許を取得後、青森師範、島根師範、山形中学などを歴任し、米子中に着任し、唱歌と数学を担当した。教諭、教頭、校長と米子中に続けて勤務し、名校長としての令名は県下に響いており、鳥取一中（当時はまだ鳥取中）校長への転任が決まると、生徒から留任運動が起きるほど、生徒たちからは慕われていた。教員は、開校時岡山師範在職教員が４人居たことが、特異な点である。教員の教育方針は、当初からスパルタ式で厳しい指導の教員が多く、しかし、師弟間の関係性も円満で、相互間の切磋琢磨の気風の傾向は、昭和初期まで変わらなかったとのことであった。

鳥取二中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気だが、初代校長は鳥取市出身で、米子中、鳥取中（一中）の校長を歴任した、先述の林重浩で、学歴や担当教科についても既に説明したとおりである。林は授業と校友会活動を学校教育の表裏一体と捉え、特に体育活動を奨励した。具体的には、野球、庭球、銃剣道、端艇、水泳などである。また将来七年制高校構想もあったため、教育内容や校友会組織も一般中学とは異なっていた。開校時、教員は地元の鳥取一中等から引き抜くことはせず[11]、全国から時間をかけて集め、最初の５年間は主要教科の英・数・国の教員の異動はほとんど無く、当時としては、教え方の上手なリベラルな教員も少なくなかった。自由主義的な私学的な教育と質実剛健的な一中（官学）的な教育、そして勤労教育（勤労奉仕の作業）が調和していた。

以上「教員文化」として、特に歴代校長や教員の教育方針や雰囲気を比較検討すると、鳥取一中は当開校時、多くの教員が慶応義塾出身者であることから慶応義塾の実学主義の考え方や、立身出世的な指導が窺える。その後、校風を一新すべく、文武両道として、積極的に体育スポーツを奨励し、社会に向けての「完成教育」への指導へと変化した。これに対して、米子中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気は、開校時は、国粋主義的な雰囲気もあったが、その後鳥取一中と同様に文武両道で、スパルタ式で厳しい指導も継承されているが、師弟間の関係性も円満で、相互間の切磋琢磨の気風の傾向も続いている。鳥取二中の歴代校長や教員の教育方針や雰囲気は、初代校長林重浩の授業と校友会活動を学校教育の表裏一体と捉えた考え方に依拠する。特に体育活動を奨励し、また将来七年制高校構想もあったため、教育内容や校友会組織も一般中学とは異なっていた。自由主義的な教育、質実剛健的な教育、勤労奉仕的な教育が調和するものであった。そして、この林校長の基本的な考え方は、彼がここで取り上げた３校のすべてで校長を務めたため、文武両道など

表5　行事活動や校友会活動の比較

	行事活動	校友会活動
鳥取一中	・明治22年から運動会が始まり、春期修学旅行も同時期に始まったようである ・明治後期からは柔道、撃剣の寒稽古が始まった ・大正に入ると校内マラソン、水泳講習会が始まった ・昭和に入ると校外教授、他の体育行事（野球、庭球等）も始まった ・軍事教練は明治期に始まったが、本格化したのは大正期からである	・明治22年の運動会実施後に、これに手を入れて校友会とし、運動会と文芸部を設置した ・明治30年に校友会襍誌（後に烏城）を創刊した ・明治32年に第1回の演説会、討論会が始まった ・明治44年に会則が改正され、会計部が設けられ、応援部をはじめ多くの部が創設された ・大正期になると運動部では野球部、剣道部が、文化部では弁論部が県内外で活躍することとなった
米子中	・明治36年から文芸大会（後の談話会、弁論大会）が始まり、京阪神への修学旅行も同年から始まった ・明治37年からは、水泳講習会、運動会も始まった ・明治40年代以降は、武術大会、野球大会、相撲大会等多くの体育行事も始まった ・軍事教練は明治期に始まったが、大正期から大規模な実践訓練となった ・大正14年から受験準備夏季講習会も始まった	・明治33年に校友会「同窓文武会」が結成された ・文化部と運動部があり、文化部文芸部の印刷物が、明治36年に「同窓文武会」誌となった ・運動部では、撃剣、柔道、端艇、野球、庭球等の活動が中心で、文化部は当初文芸部のみであった ・明治39年に、生徒自治規定ができ、全校生徒を住居別に7つの自治団に分けた学友団が組織された
鳥取二中	・大正12年に最初の校内野球大会が開催され、同年に臨海学校も開催され、その後、水泳訓練、水泳合宿と特に水泳に力を入れている ・大正13年に運動会が、翌年からは登山、同時期に柔道の寒稽古、野球、スキー大会等が始まった ・軍事教練は大正末から始まり、昭和に入ると校外教授と受験準備夏季講習会も始まった	・大正13年に校友会各部に部長が置かれ、第1回運動会が挙行された。当初は運動部（野球部、庭球部、競技部）と文化部（文庫部）の編成であった ・昭和3年に競技部が山陰大会優勝後、他の運動部もそれに続き活躍することとなった ・交友会誌「柏葉」は昭和初期に創刊した ・この交友会誌には、生徒の文章の他に、教員の研究論文も載った

出展：『鳥取西高百年史（本文編）』、『鳥取西高百年史（資料編）』、『創立七十周年記念誌』、『創立九十周年記念誌』、『創立五十周年記念誌』、『郷土シリーズ（11）学校の今と昔－鳥取市・教育の流れ－』より作成

一部共通する内容でもあったと考えられる。

（3）「生徒文化」「「校風」文化」について

〈行事活動や校友会活動〉

表5は、鳥取一中、米子中、鳥取二中の行事活動や校友会活動を比較してまとめたものである。鳥取一中の行事活動や校友会活動についてだが、行事については、明治22年5月に運動会規則を設け、同月に第1回運動会が開催された。春期修学旅行については開始時期は不明であるが、当初は県内の名勝・古跡を訪問するものであった。柔道、撃剣の寒稽古が始まったのも同時期と云われている。大正に入ると、少しずつ行事が増え、校内マラソン、水泳講習会が始まり、昭和に入ると校外教授－各学年の地理、歴史、理化(ママ)、博物などの学科を校外の見学学習で行うもの－や新たな体育行事（六千米競争、野球、庭球、弓道、柔道、剣道、水泳等）も盛んになった。軍事教練は明治19年から行われており、当初は普通体操に対して兵式体操と云われた。大正に入り、従来の「普通体操を体操、兵式体雄を教練」と呼ぶようになった。その後、大正から昭和にかけて、配属将校が派遣されて教練が実施されるようになると、軍事教練は文字通り軍隊的な色彩が濃くなっていった。校友会は、明治22年の運動会実施後にこれに手を入れて校友会とし、運動会と文芸部を設置し明治30年に校友会襍誌を創刊した。会長は校長で、会長が各部長（教員）と幹事・主任（生徒）を任命した。明治32年には校友会襍誌を烏城とし、この改革後、第1回の演説会、討論会が始まった。明治44年に会則が改正され、連絡調停する主事、会計部、道具の使用規定が設けられ、応援部をはじめ多くの部が創設された。大正期になると、運動部では甲子園で活躍する野球部、県大会優勝・全国大会出場の剣道部等が、文化部では中国地

区大会で第１等賞を獲得した弁論部が特に活躍することとなった。ここまでの流れとしては、明治初期に開校した地方の伝統旧制中学の典型的なパターンと捉えていいだろう。

米子中の行事活動や校友会活動についてだが、行事については、明治36年から文芸大会（後の校内談話会、学芸会、弁論大会）が始まり、京阪神への修学旅行も同年から始まった。明治37年からは水泳講習会、運動会も始まり、明治40年代以降は、武術大会、野球大会、相撲大会等多くの体育行事も始まった。軍事教練は明治期に始まったが、当初は体操としての位置づけであった。大正期から大規模な実践訓練となった。米子中は、体操（機械体操）や教練自体、その著名な指導者のため全国的にも右に出るものは無いというレベルであった[12)]。ここまでの全体の流れとしては、鳥取一中とかなり重複している。ただ学校関係資料に、行事活動が始まった時期が明記してない部分も多い。また、特異な点としては、大正14年から４年生、５年生を対象に進学のための受験準備夏季講習会（英・数・国）が始まったことが挙げられる。校友会は、明治33年７月に校友会「同窓文武会」が結成された。文化部と運動部があり、文化部文芸部の印刷物が、明治36年に「同窓文武会」誌となり、在校生、卒業生、教員の文章が載せられた。同年、第１回文芸大会が開催された。これは現在の弁論大会に相当するもので、各弁論の合間に、現在の文化祭のステージのような催しが行われた。この弁論大会が大正時代に盛んであったことも指摘されている[13)]。運動部では、撃剣、柔道、端艇、野球、庭球等の活動が中心で、文化部は当初文芸部のみであった。対外的な試合においては、鳥取一中と松江中に関する記述がいくつか見られる[14)]。先発校の鳥取一中と、同じ山陰の伝統校の松江中を意識していたことが窺える。また明治39年には、生徒自治規定ができ、全校生徒を住居別に７つの自治団に分けた学友団が組織された。各学友団は役員として、団長、副団長、評議員を選出し、監督として教員を１名ずつ加えた。年に数回団会を開き、団員相互の親睦をはかり自治活動に努めた。この学友団発足の背景には、おそらく通学範囲の広範さと、米子地区の地域性があると考えられる。

鳥取二中の行事活動や校友会活動についてだが、行事については運動行事が中心で、大正12年に最初の校内野球大会が開催された。同年に臨海学校も開催され、その後、水泳訓練、水泳合宿と、特に水泳に力を入れている。このことが後年、「水泳王国二中」の濫觴となるものであろう、という指摘もある[15)]。大正13年に運動会が始まり、翌年からは登山が始まった。同時期に柔道の寒稽古も始まった。その後、野球、庭球、水泳、スキー大会等が始まった。このように開校当時から、心身の鍛練としてスポーツが奨励されたが、鳥取二中の特徴としては、それと同様に作業も重視された点である。ここで言うところの「作業」とは、具体的には運動場の整備（ローラー引き）、土砂の運搬、校庭の植樹等を指す。軍事教練は大正末から始まったが、鳥取一中、米子中と同様に昭和20年の終戦まで、年々厳しいものになっていった。昭和に入ると校外教授も始まった。この校外教授についての具体的な記述は学校関係資料には無いが、おそらく先述の鳥取一中と同様の理科と社会を中心とした校外の見学学習と推察される。また同時期に、米子中と同様に進学のための受験準備夏季講習会（英・数）も始まった。校友会は、大正13年６月に校友会各部に部長が置かれ、第１回運動会が挙行された。当初は運動部（野球部、庭球部、競技部）と文化部（文庫部）の編成であった。同年９月には文庫部の開設についての記述がある。昭和３年に競技部が山陰大会優勝後、他の運動部（野球部、庭球部、水泳部等）もそれに続き活躍することとなった。文化部では絵画展覧会や音楽鑑賞会も主催された。交友会誌「柏葉」は昭和初期に創刊した。この交友会誌には、生徒の文章の他に、教員の研究論文も載った。例えば、理科教師の蝶についての研究等。また鳥取二中に転入して来た生徒と、他校に転校した生徒の感想文も載っており、異口同音に二中は、「自由に満ちている」「家庭的な雰囲気がある」「上級生が下級生に私的制裁をしない」等々の言説があるのも興味深い[16)]。

以上「生徒文化」「「校風」文化」として、行事活動や校友会活動を比較検討すると、鳥取一中は行事活

動も校友会活動も、その活動自体、成立過程、その後の展開については、明治初期に開校した地方の伝統旧制中学のパターンと捉えられる。これに対して米子中の行事活動や校友会活動は、鳥取一中と重複している部分も多いが、進学のための受験準備夏季講習会の開催や運動部の対外試合についての記述、住居別の学友団の組織等、先発校鳥取一中への対抗心と米子の地域性が窺えるものもある。鳥取二中の行事活動や校友会活動も全体の流れは、鳥取一中、米子中と重複する部分が多い。ただ明治期に開校した先の２校への対抗意識、特に鳥取一中に対して、同じ鳥取市内で２番目に開校した学校として、当初七年制高校構想と初代校長の評判から県下の俊秀が集まり[17]、独自の教育内容や方針から、意識的に違いを強調する部分を感じる。

５．まとめと今後の課題

戦前期の地方旧制中学校の学校文化（校風）を、鳥取県を事例にして明治前期に城下町で開校した学校（鳥取一中）、明治後期に商都で開校した学校（米子中）、大正期に開校した学校（鳥取二中）を中心に、学校の沿革史を中心とした記述資料を用いて、「制度文化」（学校の校訓や基本的な精神、校章）、「教員文化」（歴代校長や教員の教育方針や雰囲気）、「生徒文化」「「校風」文化」（行事活動や校友会活動）の４つの要因に着目して、学校文化（校風）を明らかにして、それがどのように形成され発展していったかを、比較・検討した結果をまとめると、以下のことがいえる。

1. 鳥取一中の学校文化（校風）は、明治初期に開校した地方の伝統的な中学に見られる、勤勉、規律、質素な校訓等である。開校時、多くの教員が慶応義塾出身者であることから慶応義塾の実学主義の考え方や、立身出世的な指導が窺える。その後、校風を一新すべく、文武両道として、積極的に体育スポーツを奨励し、社会に向けての「完成教育」への指導へと変化した。
2. 米子中の学校文化（校風）は、校訓等は、鳥取一中と重複する部分が多く、それに「質実剛健」の部分が加わったものと判断できる。校章には米子の地域性も窺える。開校時は、国粋主義的な雰囲気もあったが、その後、文武両道で、スパルタ式で厳しい指導も継承されているが、師弟間の関係性も円満で、運動部の対外試合や学友団の組織等、鳥取一中への対抗心と米子の地域性[18]が窺えるものもある。
3. 鳥取二中の学校文化（校風）は、校訓等は米子中の「質実剛健」的な部分に、親和や寛容といった柔らかい調和的な部分も併せ持つものである。初代校長林重浩の方針に従い、授業と校友会活動を学校教育の表裏一体と捉えた考え方に依拠し、特に体育活動を奨励し、また将来七年制高校構想もあったため、教育内容等も特に鳥取一中に対して、意識的に違いを強調する部分がある。

今後の課題としては、先ずは新たな分析資料の収集が必要である。今回の分析では学校関係資料が中心であったので、同窓会関係資料や卒業生関係資料の収集が必要である。次に分析枠組みについてである。今回の分析枠組みは、複数の先行研究に依拠して設定したが、もう少し検討・再考の必要であると思われる。

註

1）耳塚寛明「学校文化」日本教育社会学会編 1986,『新教育社会学会辞典』 東洋館出版社 117-118頁。
2）斎藤編　2015,2頁。
3）久富　1996。
4）「校風」文化の表記については、久富に従った（前掲　1986,18頁）。
5）鳥取西高百年史編纂委員会　1973a, 48頁。
6）篠村昭二　1980, 190頁。
7）創立五十周年記念誌編集委員会　1972, 36頁。
8）同上　37頁。
9）同上　62頁。
10）同上　60頁。
11）篠村昭二 1981, 115頁。
12）創立七十周年記念誌編集委員会　1969, 297頁。
13）同上　72頁。

14）同上　9頁, 122頁。
15）前掲書　1972, 64頁。
16）同上　139頁。
17）同上　60頁。
18）この地域性については、例えば米子中学の後身の米子東高校に対する地方エリート性が、戦後から現在も続いていることも指摘されている。例えば、卒業生の以下の様な回想がある。
　「未だに、この地方では大学の出身校より、どこの高校の出身かの方がウエートを占める。「どこの高校を卒業されました？」の返事に胸をはって「東高校です。」と言える言葉が、我々に自信を持たせてくれる。（後略）」（鳥取県立米子東高等学校　1989, 548-549頁）。また最近の新聞記事でも、以下の様な指摘がある。「（前略）県西部では有名ブランドのように特別視され、「米東（米子東高校）でなければ人でない」「どの大学を出たかより、米東か否かが重要」という人もいるほど。昔から浪人してでも目指す生徒がいたと聞く（後略）」（『山陰中央新報』2020年9月7日1面「明窓」）。

その他の主要参考文献・資料

ウィラード・ウォーラー　1932, 石山脩平・橋爪貞雄訳『学校集団－その構造と指導の生態－』明治図書, 1957。
久保義三他編　2001,『現代教育史事典』東京書籍。
黒羽亮一　1994,『学校と社会の昭和史（上）』第一法規出版。
斎藤利彦　1995,『競争と管理の学校史　明治後期中学校教育の展開』東京大学出版会。
――　編　2015,『学校文化の史的探求 中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』東京大学出版会。
サンデー毎日編集部　1974,『日本人脈新地図・〈西日本編〉』泰流社。
増進会出版社編　1992,「ハイスクール白書［島根・鳥取県］出雲・松江北・鳥取西・米子東」『アヴリオ』10月号。
久富善之　1996,「学校文化の構造と特質」『講座学校6 学校文化という磁場』柏書房。
平松齊他　1982,『旧制七年制高校』學藝書林。
広田照幸　1989,「進路としての軍人－陸軍士官学校の受験を中心に－」『アカデミア　人文・社会科学編第50号（204集）』南山大学。
――　1997,『陸軍将校の教育社会史－立身出世と天皇制』世織書房。
毎日新聞社編　1978,『教育を追う⑤十五の春』8-15頁。
吉本俊二　1994,『一目でわかる学校系列と教育業地図』日本実業出版社。
渡辺一弘　1998,「昭和初期の中等学校生の進路選択（1）－熊本県の2校を事例として－」『日本教育社会学会 第50回大会 発表要旨集録 1998』326-327頁。
――　2015,「昭和初期の旧制中学校生の進路選択に関する研究－九州の事例を中心に－」『別府大学短期大学部紀要』第34号　123-132頁。
――　2018,「昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況に関する研究－安積、磐城、福島、相馬各中学の状況との比較・検討を中心に－」『会津大学短期大学部研究紀要』第75号　117-127頁。

《付記》

資料の引用に際しては、旧字体の一部は新字体に改め、句読点や濁点を付した。また明らかな誤植、間違いと判断できるものは訂正した。

（受稿 2020年9月30日，受理 2020年11月4日）